

聖書は肉食・動物をどう扱っているか

——創世記——

奥田和子

How the Bible Treats the Eating of Meat and Animals——the Book of Genesis

OKUDA Kazuko

Abstract : Our country has long lived on rice. However, meat consumption has gained in quantity during the last half-century. The eating of meat has been growing in popularity. It differs completely from eating food from vegetable matter. Here arise several points for discussion:

1. Killing animals is an act of cruelty.
2. Since the amount of energy needed in producing meat is ten times greater than that for producing grain, the productivity of meat production is lower than that of grain. Grain can feed far more people than meat. As a large swell in the population of the world is expected, we will surely face a shortage of food.
3. Eating meat intakes not only protein, but also animal fat. It is injurious to our health. It can cause obesity, heart disease, cerebral blood problems and cancer.
4. It may be difficult to avoid infections such as bovine spongiform encephalopathy, foot-and-mouth disease and chicken influenza in raising cattle or pigs and breeding chickens. Such affected animals are not fit for providing a steady supply of food. Plants and grain are better qualified as food sources.

I looked over the Bible to pick up some ideas about the contract between God and man, His ideas on eating meat, and the co-existence between man and animals.

Here I have followed up the Book of Genesis, which consists of fifty chapters. The contents of the Book of Genesis are as follows: the Creation of Heaven and Earth, the Garden of Eden, Cain and Abel, from Adam to Noah, the Flood and Noah, the New World Order, the Tower of Babel and the Family Tree of Abraham, the Story of Abraham and the First Half of the Life of Isaac, the Latter Half of the Life of Isaac and the Story of Jacob, the Family of Esau, the Last Blessing and Death of Jacob, and the Death of Joseph.

Finally, I came to understand “what” and “how” man eats, how man eats “meat” and how “created man, plant and animal” can co-exist.

はじめに

わが国は、長期にわたり米を主食とする食事形態を維持してきた。しかしここ半世紀の間、肉の消費量が急速に伸び、肉食傾向が強まっている。動物を殺して食べる肉食は、植物性の食べ物とは質的に異なり、次のような問題点が指摘される。すなわち①生きた動物

を見殺しにするという残虐性、②肉を生産するために投入するエネルギー量が、穀類に比べて10倍も多く必要でありエネルギー効率が低い。穀類のほうが肉食より多くの人口を養うことができる。今後世界の人口増加が予想されるなかで、食糧供給不足が問題になっている。③肉食はたんぱく質の摂取に加えて動物性脂肪も同時に取り込む。そのため、肥満、心臓疾患、脳血管障害、ガンなどの疾病を誘発し健康上好ましくな

い。④牛の BSE、鶏インフルエンザ、豚の口蹄病など獣鳥肉類の飼育には危機的要素が多く安定供給が難しい。植物・穀類を食糧資源にするほうが遙かにリスクが小さい。

こうした問題をはらむ肉食の拡大にははじめをかけるために、聖書をひもとくことにした。食べ物をめぐり神と人との契約、肉食の教え、人と動物との共生関係を調べることで、なんらかの示唆がえられると考えたからである。

本稿では、まず 50 章からなる創世記を辿る。創世記は、天地の創造、エデンの園、カインとアベル、アダムからノアまで、洪水とノア、国々の表、バベルの塔とアブラハムの系図、アブラハム物語とイサクの前半生、イサクの後半生とヤコブ物語、エサウの一族、ヨセフ物語、最後の祝福とヤコブの死、ヨセフの死という内容である¹。

その結果、人は「なに」を「どのように」食べるのか、「肉」をどのように食べるのか、「創造された人、植物、動物」の相互共生関係、肉食と神の意図について興味深い示唆をえることができた。

1 天地創造と草食のすすめ

神は、植物と動物を造られた。そしてアダムとエバが最初に食べたのは、木になる果実であった。

以下、聖書²の言葉を具体的にみてみよう。

神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。そのようになった。…第三の日である。」(創世記第1章第11-13章である。以下創世記1:11-13と省略表記する。)

新共同訳の解釈では、《草》《種を持つ草》《種を持つ実をつける果物》の3種類とみなしている。同じく3種類とする解釈は、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果実とを地の上に生えさせよ。」「地は青草と、種類にしたがって種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ木とをえさせた。神は見て……」³

「種類にしたがって」とは、植物の場合、種を外に着ける大麦や小麦のような草本と種をその果実の中に閉じこめているいちじくやオリーブなどの樹木という2つに分けている⁴。

一方、「草、すなわち種ができる草」と「種ができる実がなる木」の2種類とみなす解釈、さらに「(い

ろいろな種類の) 植物を地上に生やせ」が基本部分で、その「植物」とは「種ができる草」と「種ができる実がなる木」であるという補足説明の語句が付加されているという解釈も可能という⁵。

神は言われた。

「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。(創世記1:24-25)

《這うもの》とは、蛇、鱈、とかげなど《地の獣》とは野獣である⁶。

そして神は次に、人間にこれらの生き物を支配させようと言われたのである。「支配」とはどういう意味であろうか。

神は言われた。「我々にかたどり、……支配させよう。」(創世記1:26)

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ……生き物をすべて支配せよ。」(創世記1:28)

陸の動物は「草と青草」、すなわち自然に成長し、栽培する必要のない植物を食べ、それに対し人間は、穀物と木の果実、すなわち栽培を必要とする植物を食べるということにしている。この食物指定が両者の抗争を回避している。さらに、両者の調整は人間の「支配」によってなされる。その際、[支配]の1つの要素である「地をあなたがたに従わせよ！」は食べ物調整にとって不可欠の、農地耕作の認可を表している。第2の要素、大地から発生した動物に対する支配(創世記1:26,28)は、共通の生活空間である地に住む陸の動物と人間との間に争点がおある場合には、人間が裁断しなければならない、ということの意味している。(そして、それは魚と鳥に対してもあてはまる。)……人間への、この決定権の委託には、当然、人間と動物の共生に対する責任が結びつけられている。……人間が人間以外の被造物を無際限に自由にすることを意味することはありえないことは明白であるという⁷。

また創世記1:26-31における「人の支配」については次のようにいわれる。

神が創造することによってそれぞれに生得の権利としての有益さと尊厳を与えた。被造物の有益さは必ずしも「人」に関係しているわけではなく、その尊厳は必ずしも「人」に依存するものではないことは明白である⁸。

鳥や魚や獣(そしてすべての植物)に奪うことで

ない存在の権利と物事の神の図式の中でそれぞれの場所が与えられた。自分の好きなようにこれらを利用してよいというような白紙委任ではなかった。人の権限は、神の代理として任命された権利であったという⁸⁾。

ヘブルの動物観については次のような指摘がある。ヘブルの人々が持っていたのは、「動物に対するやさしさ」ではなく、動物に対する尊敬であり、かれらの尊厳やかれらの習慣や生存する権利に対する尊敬で多くの種類の植物にもあてはまる。人類に対するほどの尊敬ではなく、神がかれらを創造されたために当然はらわれるべき尊敬であると述べられている⁹⁾。

神が人間に与えた食べ物とは以下のようなものであった。すなわち、

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」(創世記 1: 29-31)

参考までに以下の4つの聖書で英文をみると、

「I have provided all kinds of grain and all kinds of fruit for you to eat; but for all...」(Genesis 1: 29)¹⁰⁾

「Then God said, "I give you every seed-bearing plant on the face of whole earth and every tree that has fruit with seed in it. They will be yours for food. And to..."」(Genesis 1: 29)¹¹⁾

「And God said, "See, I have given you every herb that yields seed which is on the face of all the earth, and every tree whose fruit yields seed; to you it shall be for food. Also, to every..."」(Genesis 1: 29)¹²⁾

「God also said: "See, I give you every seed-bearing plant all over the earth and every tree that has seed-bearing fruit on it to be your food:..."」(Genesis 1: 29)¹³⁾

また、「すべての命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう」(創世記 1: 30)と書かれている。人間も動物もすべてが肉食主義であることが述べられている。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」(創世記 2: 15)

ちなみに、守るという英文は聖書によると次のようである。

「Then the Lord God placed the man in the Garden of Eden to cultivate it and guard it.」(Genesis 2: 15)¹⁰⁾

「The Lord God took the man and put him into the Garden of Eden to work it and take care of it.」(Genesis 2: 15)¹¹⁾

「Then the Lord God took the man and put him in the garden of Eden to tend and keep it.」(Genesis 2: 15)¹²⁾

「The Lord God then took the man and settled him in the garden of Eden, to cultivate and care for it.」(Genesis 2: 15)¹³⁾

ここで「土を耕し守る」という言葉の意味はなにか。守るということは「注意深く世話をすることができるよう人間に道徳的支配を共有する。」と解釈されている¹⁴⁾。

「耕す」という動詞は、楽園の仕事とは相いれないものではないこと、また、楽園とは魔法によって必要な物がすべて木から落ちてきて、われわれは何もせずにおいてそれらを楽しむことができるような場所であるとする考えが、ヘブル人の概念ではないということも抜け目なくわれわれに思い起こさせてくれる。聖書の楽園では「人」は仕事をするように求められていると述べられている¹⁵⁾。

主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」(創世記 2: 16-17)

ところがアダムはこの神の命令にそむいて禁止を破り、木から取って食べてしまう。そこで、

神はアダムに向かって言われた。

「お前は女の声に従い

取って食べるなど命じた木から食べた。

お前のゆえに、土は呪われるものとなった。

お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。

お前に対して

土は茨とあざみを生えいでさせる

野の草を食べようとするお前に。

お前は顔に汗を流してパンを得る

土に返るときまで。

お前がそこから取られた土に。

塵にすぎないお前は土に返る。」(創世記 3: 17)

-19)

ここには、なぜ人間は食べ物を得るために苦勞して土を耕さなければならないのか、またなぜ苦勞して土を耕しても豊かな実りを得られないのかという原因物語的な問いに対する答えが述べてあるともいわれる¹⁶。

また、農耕地での仕事が今や骨の折れるものになるということを意味している。摘み取らなければならない茨とあざみは、人間の顔に汗をかかせる。しかし、人間と耕地との存在関係は続き、人間はその生命の終わりに、そこからかれがとり出された耕地へと帰る¹⁷。

なぜ、食べるために苦勞して働いても、結局は死ななければならないのかという人間存在の不条理についての原因物語的な問いに対する答えであるという¹⁸。

主なる神は言われた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」(創世記3:22)

「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。」(創世記3:23-24)

「人」は楽園から追放され、もはや不死を手に入れることはできなくなった。

「食べると必ず死んでしまう」というのは、人がその実を食べた「その日」、人は「きつと死ぬ」であろうという神の警告は、嘘ではないが、人の不服従の究極的な結果に人の注意をむけるむしろ厳しい方法であった¹⁸。

もし人間が大胆にも楽園に戻ってきても、かれらは追い払うための閃光を発して回る剣を持つケルビムの軍に委任された¹⁹。

以上、天地の創造において神は自分の創造したのを見て極めて良かったといい、満足している。そして、創世記1-3において、人が食べる物は「食べ物」という言葉で表現し「植物である」と位置づけられている。

その「食べ物はなにか」といえば2つある。種をつける草と実をつける木である。これらは1種類ではなく、どちらにもそれぞれという言葉が入っている。これは「いろいろの種類」「あらゆる種類」の意味であ

ると解釈されている⁶。多くの植物が食べ物として人間に与えられたことが記されている。

「食べ物はどこにあるのか、どのようにして得るのか」では、1つは園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の木からは決して食べてはならないと禁止されている。また、木の実を取って食べるにとどまらず、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し守るようにと記されている。しかし、アダムはその禁止を破って取って食べてしまったため、神はエデンの園からアダムを追放したので、エデンの外で土を耕すことになった。

総合すると、「植物」が食べ物であり、さらに「土を耕してそこに種を植え世話をして食べる」ということになる。ここでは、魚や肉は食べ物の範囲には入っていない。まさに「菜食主義(ここでは動物の肉を食べなさいという文章は見当たらない)」であるといえる。さらに、食べ物を得るためには「顔に汗してパンを得る」と述べている。パンという表現、しかも働いて食べ物を得よという。「野の草を食べようとするお前にとって、土は茨とあざみを生えいでさせるという。この行為はおまえが土に返るときまで、すなわち死ぬときまで続く」と申し渡している。食べ物を得るということは苦しみをともなう大変なことになると教えている。人は食べ物なしには生きていけない。

2 神は菜食より肉食を好んだのか

創世記には2人の兄弟が登場しそれぞれ別々のもの、すなわち「土の実り」と「羊の初子」を神に献げた話が述べられている。神は後者の弟がさしだした「羊の初子」に目を留めたことと記されている。

以下、具体的に見てみよう。

カインとアベルについて

「アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕やす者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルの献げ物に目を留められたが、カインのその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。」(創世記4:1-5)

兄は土を耕し、弟は羊を飼ったと記されており、兄弟は分業をしていた。神は弟のほうを持ってきた羊の初子に目を留めた。

また、以下の話もついでにあげておく。すなわち、

「…ヤバルは、家畜を飼い天幕にすむものの先祖となった。その弟はユバルといい、豎琴や笛を奏する者の先祖となった。ツイラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅や鉄でさまざまな道具を作る者となった。」（創世記4：19-20）

なぜ、神がカインの献げ物ではなくアベルの献げ物のほうに目を留めたかということについては、以下の解釈がされている。

アベルという名前は、無意味や無価値のようにみなされている存在、軽蔑されている者、無価値な者、不利で弱い立場に置かれている者を象徴的に意味する。そこで、神は小さい者などを選び、愛したということの意味しているのではないか。イスラエルは元来アベルのような存在だったのであり、だからこそヤハウェはイスラエルを選んだのであった。アベルは《羊を飼う者》（4：20では家畜を飼う者の先祖はヤバル）カインは《土を耕す者》となるが、牧畜と農業は古代社会の基本的な生活形態。雨の多い年には共立的関係が成り立つが、そうでない場合はしばしば対立や闘争が生じたという²⁰⁾。

献げ物として、神が羊の初子を選んだのには単に神が肉食を好んだというのではない。

上記のようなわけがあったようである。

人間と大地との関係は、大地が兄弟の血を飲んで以来、壊されてしまった。（創世記4：10以下）このような重大な呪いがある程度恵みによって和らげられたことを、ヤハウイストはノアによって始まったおどろ作りの習得の中にみたと思われる。（創世記5：29, 9：20）カイン物語は牧畜、農業というふうに分々に生活維持が分裂したことを示している。このような分裂は非常に深いものである。なぜなら、異なる文化史的変容についてカインの系統樹が報じている。共同生活という特別な形態をもつ都市の他に、牧者、楽師、鍛冶屋が登場する。最後の人たちは決定的に新しい何かを人間の文化史にもたらす。すなわち剣である。この発見が人間を直ちに悪へと誘う。ヤハウイストはそのことを重要だとみている（創世記4：22-24）²¹⁾。

この節が主に強調しているのは、さっと述べられて忘れられている捧げ物のことではなく、二人に対する神の反応とその後の神の決定に対するカインの反応である。見てきたように、全体のポイントは、アベルの捧げ物は単に神がそれを受け取ると決めたから受け取られたのであり、カインの捧げ物は受け取らないと決めたから受け取られなかったということである。…カインは、神の決定を受け入れることを拒否したことに

おいて、それ故、人間がなすべきでないことをする、すなわち人間と神との関係に関する規則を破棄しようとする墮落した人間を表している²²⁾。

3 神は人間の肉食を限定つきで認める

天地創造の後、地が墮落し不法に満ちていることを神は御覧になり、人だけでなく家畜も地を這うものも空の鳥も造ったことを後悔される。そして、神は地もろとも滅ぼすが、ノアだけは神に従う無垢な人だったので特別に好意で許され、清い動物と空の鳥を舟にのせて助けた。しかし、その他のものはすべて洪水で滅ぼされる。

具体的にみてみよう。

主は言われた。

「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。しかし、ノアは主の好意を得た。」（創世記6：7-8）

この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。神はノアに言われた。

「すべての肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。（創世記6：11-13）

すべて肉なるものとは、生きている者すべての意味である²³⁾。

神は洪水で生き物をことごとく打つ

洪水

「あなたは清い動物をすべて七つがいつ取り、また清くない動物をすべて一つがいつ取りなさい。空の鳥も七つがいつ取りなさい。」（創世記7：2-3）

洪水が終わった時に、神は救われたノアに対して、生き物をことごとく打つことは二度とすまいと約束された。

具体的にみてみよう。

「ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。」（創世記8：20）

主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。
「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。(創世記 8: 21)

ノアが祭壇を築いて、家畜と鳥を焼き尽くす献げ物として主にささげると、主は焼き尽くす献げ物からたちのほろ宥めの香りをかいで、この度したような生き物をことごとく打つことは二度とすまいと、決心された。

そして、神はノアと彼の息子たちを祝福し、契約を交わされた。すなわち、地のすべての獣と空のすべての鳥、地に這うすべてのものと海の魚をあなたたちの手にゆだねると言われる。ただし、肉はこのような状態では食べてはならない。つまり、肉は血を含んだままでは食べないように言われる。血は命だからである。

創世記 1-29 で述べられていた菜食主義に、ここであらたな契約である「肉」が「食糧」という形で登場する。

具体的にみてみよう。

祝福と契約

神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地のすべての獣と空のすべての鳥は、地に這うすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちのまえに恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしは、これらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。

また、あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する。

人の血を流す者は

人によって自分の血を流される。

人は神にかたどって造られたからだ。

あなたたちは産めよ、増えよ

地に群がり、地に増えよ。」(創世記 9: 1-8)

英文を以下にみておきたい。

「God bless Noah and his sons and said, “Have many children, so that your descendants will live all over the earth.”

All the animals, birds, and fish will live in fear of you. They are all placed under your power.

Now you can eat them, as well as green plants, I give them all to you for food.

The one thing you must not eat is meat with blood still in it; I forbid this because the life is in the blood.

If anyone takes human life, he will be punished. I will punish with death any animal that takes a human life.

Human beings were made like God, so whoever murders one of them will be killed by Someone else.

“You must have many children, so that your descendants will live all over the earth.”

God said to Noah and his sons,」(Genesis 9: 1-8)¹⁰⁾

The God blessed Noah and his sons, saying to them, “Be fruitful and increase in number and fill the earth. The fear and dread of you will fall upon all the beasts of the earth and all the birds of the air, upon every creature that moves along the ground, and upon all the fish of the sea; they are given into your hands. Everything that lives and moves will food for you.

Just as I gave you the green plants, I now give you everything. “But you must not eat meat that has its lifeblood still in it. And for your lifeblood I will surely demand accounting. I will demand an accounting from every animal. And for your lifeblood I will surely demand an accounting. I will demand an accounting from every animal. And from each man, too, I will demand an accounting for the life of his fellow man.

Whoever sheds the blood of man, by man shall his blood be shed; for in the image of God has God made man.

As for you, be fruitful and increase in number; multiply on the earth and increase upon it.

Then God said to Noah and to his sons with him:」(Genesis 9: 1-8)¹¹⁾

So God blessed Noah and his sons, and said to them: “Be fruitful and multiply, and fill the earth. And the fear of you and the dread of you shall be on the air, on all that move on the earth, and on all the fish of the sea. They are given into your hand. Every

moving thing that lives shall be food for you. I have given you all things, even as the green herbs. But you shall not eat flesh with its life, that is, its blood. Surely for your lifeblood I will demand a reckoning; from the hand of every beast I will require it, and from the hand of man. From the hand of every man's brother I will require the life of man"

*"whoever sheds man's blood,
By man his blood shall be shed;
For in the image of God
He made man.
And as for you, be fruitful and multiply;
Bring forth abundantly in the earth
And multiply in it."*

Then God spoke to Noah and his sons with him, saying:」 (Genesis 9: 1-8)¹²⁾

「God blessed Noah and his sons and said to them: Be fertile and multiply and fill the earth. Dread fear of you shall come upon all the animals of the earth and all the birds of the air, upon all the creatures that move about on the ground and all the fishes of the sea; into your power they are delivered. Every creature that is alive shall be yours to eat; I give them all to you as I did the green plants. Only flesh with its lifeblood still in it you shall not eat. For our own lifeblood, too, I will demand an accounting: from every animal I will demand it, and from man in regard to his fellow man I will demand an accounting for human life.

*If anyone sheds the blood of man,
by man shall his blood be shed;
For in the image of God
has man been made.*

Be fertile, then, and multiply; abound on earth and subdue it." God said to Noah and to his sons with him:」 (Genesis 9: 1-8)¹³⁾

なぜ、洪水のあと肉食が許されるようになったかについては、P 伝承は大洪水を一世界の破局として描く。…被造物の共生が壊されていることから出発する。洪水後の人類の生活状態を特徴づけるのは、「暴力行為」「法律違反」である。それを制御するためにヤハウエは特別の秩序を告示する。彼の動物の殺害と屠殺とを許すが、しかし、人間の生命は絶対的な守護の下においた²⁴⁾。

《産めよ、増えよ、地に満ちよ》は創世記 1:28 の

祝福の繰り返しで、これによって、アダムの祝福がノアにおいて更新されたことが意味されている。さらに、2節の《地に這うすべての…あなたたちの手にゆだねられる》はアダムへの神の委託の言葉も繰り返されており、洪水が創造以前の状態への復帰であり、創造の更新にはかならないことが暗示されている。そして、この更新は人類に「肉食」が導入されるようになった低次元の段階とみなされていることがわかる²⁵⁾。

この肉食が許されたことに関しては、無条件ではないという指摘がある。すなわち、「わたし（神）はすべてのものをあなたたちに与える」というが、血を流すことなく、生命を奪うことなく、動物を殺すことが一体誰にできようか、リンゼイは次のように言う。すなわち、「以前禁じられていたことが、いまや—現在の状況においては—許される。あなたは食べ物のために殺してよろしい。しかし、あなたはあなたが殺す命はあなた自身のものではないということ—それは神に属しているということ—を覚えて、その理解のうえにおいてのみ、あなたは殺してよいのだ。あなたは、あなた自身のものではないものをあやまって自分のものにしてはならないのだ。動物の命であれ、人間の命であれ、あなたのものでないものを殺すときには、あなたが殺す全ての命にたいして、あなたは個人的に神に責任を負っているということを記憶する必要がある」²⁶⁾

肉を食べるということは止むをえない選択であるという論述もある。

「創世記9章は人間に、食べ物として動物を殺す絶対的の権利を与えていないということが直ぐにわかるであろう。正しく語ると、実に、殺す「権利」は存在しない。神は必要という条件のもとにおいてのみそれを許す。」という²⁷⁾。

また、「自由と進歩的シナゴグ同盟」による最近の宣言は、次のように表現している。「洪水の後になってからだけ（と創世記9章は主張する）人間の弱さと食べられる植物が少ないと考えられたがゆえに、讓歩として理解されたのである。」²⁸⁾

また、「旧約聖書は……自然にたいする搾取的、人間の利己的態度を示す非難を正当化するようなことはなにもしない。事実として、旧約聖書は人間が自然を餌としていることを認識しているが、それはまた、人間にたいする神の最初の完全な意図からの墮落として特徴づけている。」²⁸⁾以上の解釈によれば、住む環境によっては植物の少ない場合もあろう、その場合やむなく動物を食べることは許されるが、神の完全な意図か

らは墮落として認識するべきだという。

「人間は動物よりも道徳的に優れているという見解が、善良な動物の権利の理論にとっていかに中心的であるかということを示してみよう。人間の独自性は奉仕と自己犠牲の能力者として定義されると強く主張したい。この視点からすると、人間は一人の大司祭にならって、ただ単に自分自身の種のためだけでなく、感覚をもつ全ての被造物のために自己犠牲的の祭司性を実行すべく独自に任務を与えられた種なのである。同胞たる被造物の呻きと苦労は、創造の癒しと解放における神との共同作業ができる種を必要とする。」²⁹

人間はすべての被造物にたいして自己犠牲的な祭司性を発揮するよう神と共同作業をしなければならないのに、肉食にうつつをぬかし埋没することは神の本来の意図からはずれ、反するという解釈である。

エデンでは植物食をなぜ示したのかという疑問が投げかけられている。そしてその答えとして、エデンでの人間の食原則では、理想的生を描きだしたことだけではなく、理想的生を描くのに、動物食を回避し、植物食のみによる生をもってしたのはなぜかという点である。なぜ動物を認めなかったのかという。流血と殺しを必然とする肉食を回避した、一つの理想的・始原的人間の姿を描こうとしたのだ。そうすることで、罪汚れない、苦しみも骨折りもない楽園的な生から、いかにも苦労の多い現在の生が到来したかを解説する、その前置きとなるという。さらに、人間に与えられることになった動・植物を「治める」権限として、なにが許容されたのか。このあたりは疑問のまま残って、確かなイメージを結ばないという³⁰。

神はノアと彼の息子たちに言われた。

「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば……」(創世記9: 8-11)

神はノアに、この契約を誰と交わしたかについて次のように述べる。すなわち「あなたたち(人間)とそして共にいるすべての生き物と」すべての生き物という言葉を六回も繰り返して言っている。

具体的に見てみよう。

更に神は言われた。

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる

契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。……わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。……雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」(創世記9: 12-17)

神はノアに言われた。

「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

契約の印とは、それによって契約を想起させ、契約を守ることをうながす契約や目印となるものである³⁵。

肉なる全てのものというのは、人間を、さらに人間だけでなく、地上のすべての生き物を人間と同一線上に並べて神は以後けっして減ぼさないと契約をかわした。動物も人間と同じ神の創造物であるという意味からかれら自身も価値がある。

4 人々が肉を食べる場面

旧約聖書には食事をする場面が多く見られるが、創世記に肉食の場面がいくつか見られるのでそれを拾ってみよう。

アブラハムの召命と移住

主はアブラハムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。(創世記12: 1)

アブラハムがハランを出発したときは75歳であった。アブラハムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方へ入った。(創世記12: 5)

そこからベテルの東の山へ移り、ネケブ地方へ移った。ネケブでは飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在した。

エジプト滞在

エジプトで妻サライが美貌であることからファラオの宮廷に召し入れられ幸いを受けた。しかし、神は宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。そのためにフ

アラオはアブラハムと妻サライはエジプトから立ち去らせた。

アブラハムーカナンに定住 (BC 1850)

エジプトを出た一行 (アブラハムたち) は再びネケブへ上った。(創世記 13: 12)

イサク誕生の予告

「主はマムレの櫨の木所でアブラハムに現れた。……目をあげて見ていると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。……アブラハムは…サラ (妻) のところに来て言った。「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」(創世記 18: 1-6)

「アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうの子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。アブラムは凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。」(創世記 18: 7-8)

アブラハムが天幕の入り口の日陰で休息していると、主の御使いが突然訪れた。アブラハムは走り出て、地にひれ伏してお迎えした。おいしそうの子牛の肉の料理、凝乳、乳が並べられた。食べるのは普通の人ではなく神の御使いであり、尊い方である。そして、アブラハムは彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。このように、アブラハムが「走り」「ひれ伏し」「急いで用意し」「そばに立って給仕した」という行動から、いかに丁寧なおもてなしをしたかが推察される。

神の御使いが3人も暑い真昼にやって来たのだから、珍しいおいしい食べ物を差し上げたい。おそらく普段食べない物が特別に御馳走として出されたのではなかろうか。解説書にもこれは豪華な料理であったという³¹⁾。

ソドムの滅亡

「二人の御使いが夕方ソドムに着いたとき、ロト (アブラハムの甥) はソドムの門の所に座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって迎え、地にひれ伏して、言った。「……しかし、ロトがぜひにと勧めたので、彼らはロトの所に立ち寄り

ことにし、彼 (ロト) の家を訪ねた。ロトは、酵母を入れないパンを焼いて食事を供し、彼らをもてなした。」(創世記 19: 1-3)

二人の客人は共に神の御使いである。酵母を入れないパンは急いで作る即席のパンであり懸命に接待しようとするロトの姿が目には浮かぶ³²⁾と解説書には述べられている。座っていたのを「立ち上がって出迎え」「地にひれ伏して言う」。それほどの客人にもかかわらず、アブラハムのと時のような御馳走の肉ではなくここではパンを焼いただけである。ソドムの町は悪がはびこり荒廃していたせいであろう。パンを焼くのが精一杯のおもてなしであったと思われる。日頃から肉を食べているとはとても考えられない。

イサクの誕生

アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガル (女奴隷) に与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。ハガルは立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。……(創世記 21-14)

長旅に出るのにパンと水という簡素な食べ物をもっての出で立ちであり、肉はない。

エサウとヤコブの誕生

長子の特権

(イサクの) 二人の子供は成長して、エサウ (兄) は巧みな狩人で野の人となったが、ヤコブ (弟) は穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩の獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した。……」(創世記 25: 27-29)

ここでは狩りが行われたこと、イサクは狩の獲物が好きであったことがわかる。そして、ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。イサクは疲れきっていたので長子の権利とひきかえにヤコブが煮ているその食べ物が食べたいと願い出た。そこで、ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。イサクとリベカ (イサクの妻) の間に生まれた双子の兄弟が食べ物をめぐってやりとりをしたのである。しかし、長子の権利と引きかえたその料理とは、パンとレンズ豆の煮物であり、肉ではない。

リベカの計略

イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこで上の息子のエサウを呼び寄せて、

「息子よ」と言った。エサウが「はい」と答えると、イサクは言った。「こんなに年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持ってきてほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」(創世記 27: 1-4)

リベカは息子のヤコブに言った。「今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。……わたし(リベカ)の子よ。今、わたしが言うことをよく聞いてそのとおりにしなさい。(創世記 27: 6-8)

家畜の群れのところへ行って、よく肥えた子山羊を二匹取って来なさい。わたし(リベカ)が、それでお父さん(イサク)の好きなおいしい料理を作りますから、それをお父さん(イサク)のところへ持って行きなさい。……(創世記 27: 9-10)

イサクが死ぬ前に食べたいと懇願したのは「好きな」「おいしい料理」であり、それは「狩の獲物(肉料理)」であった。また、そのためには狩に行き獲物を取ってくる、もしくは家畜の群れの中からよく肥えた子山羊を取ってきて父親の好きな料理をつくったことがわかる。子山羊である。自分のうちに家畜の群がありながら、あえて兄エサウに狩の獲物を捕りに行って来るようにとイサクは命じている。そのほうが、肥えた家畜よりおいしかったからであろうか。

ここではっきりしているのは、子どもたちが食べているのはパンとレンズ豆の煮物である。おそらく日常食であろう。そして父親は、死を目前にした非常時、この世の食べ納めに狩をした肉を食べる。肉料理は、まさかの時に食べられていたと考えられる。

ラバンの追跡

ヤコブは父の命令でカナンのラバン伯父さん(リベカの兄)のもとへ旅立ち、そこでラバンの娘と結婚し約束の期間を過ごした。その後故郷である先祖の地へ返ろうとしたが、増えた家畜の分与でいざこざが生じたために、ヤコブはついに逃亡を計った。ラバンは後を追ってきた。ヤコブは尋ねた。何の罪があって、わたしの後を追って来られたのですか。……

「この二十年間というもの、わたしはあなたのもとにいましたが、あなたの雌羊や雌山羊が子を産み損ねたことはありません。わたしは、あなたの群れの雄羊を食べたこともありません。野獣にか

み裂かれたものがあったとしても、あなたのところへ持って行かないで自分で償いました。……わたしはあなたの家で過ごしましたが、そのうち十四年はあなたの二人の娘のため、六年はあなたの家畜の群れのために働きました。しかも、あなたはわたしの報酬を十回も変えました。……」(創世記 31: 38-42)

ここでは、二十年間伯父ラバンのもとで暮らしたが、ラバンの群れの家畜を一回も口にすることがないと弁明している。一生懸命働いて家畜を増やしたにもかかわらずである。このことは、家畜をみだりに殺して食べなかったこと、家畜は大事にされていたと考えられる。

ヤコブは父がかつて滞したカナンの地に住んでいた。ヤコブには息子が十二人いた。父イスラエルは(ヤコブ)末っ子のヨセフをどの兄弟よりもかわいがったので、兄たちからねたまれて、穴に投げ込まれエジプトへ行く隊商に売られ、エジプトで暮らした。次第に出世してヨセフは司政者になっていた。具体的に見てみよう。

また、世界各地の人々も、穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやってくるようになった。世界各地の飢饉も激しくなったからである。(創世記 41: 56)

飢饉は世界各地に及んだ。ヨセフはすべての穀倉を開いてエジプト人に穀物を買ったが、エジプトの国の飢饉は激しくなっていた。また、世界各国の人々も穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやってくるようになった。世界各地の飢饉も激しくなったからである。イスラエルに住むヨセフの兄たちも、飢饉で食べ物なくなってきた。そこで食べ物を買うためにエジプトに下って行った。そして穀物を買って、ろばに積んで帰った。しかし、この地方の飢饉がますますひどくなる一方で、エジプトから持ち帰った穀物を食べ尽くすと、父は息子たちに言った。もう一度、エジプトへ行って我々の食糧を少し買って来なさい。

再びエジプトへ

ヨセフはベニヤミン(兄弟で弟)が一緒なのを見て、自分の家を任せている執事に言った。「この人たちを家へお連れしなさい。それから、家畜を屠って料理を調えなさい。昼の食事をこの人たちと一緒にするから。」(創世記 43: 16)

エジプトでは、昼の食事、家庭でのおもてなし料理に家畜を屠って食べていたようである。

ヨセフの政策

飢餓が極めて激しく、世界中に食糧がなくなった。……ヨセフは答えた。「家畜を連れて来なさい。もし銀がなくなったのなら、家畜と引き換えに与えよう。人々が家畜をヨセフのところに来て来ると、ヨセフは、馬や、羊や牛の群れや、ろばと引き換えに、食糧を与えた。ヨセフはこうして、その年、すべての家畜と引き換えに人々に食糧を分け与えた。その年も終わり、次の年になると、人々はまたヨセフのところに来て、言った。……」(創世記 47: 13-18)

食糧と引き換えるために家畜を連れて来なさいというのは、食糧とは、穀類をさし家畜それ自体は食糧とはなりえないことを示している。

引き換えられる家畜とは、馬や、羊や牛の群れ、ろばである。

エジプトという土地は、周辺の国々に比べて食糧が豊富であり、豊かな食生活をしていたのであろう。日常食として肉を食べている。

5 動物たちは家畜として人々に役立っている

1 荷物の運搬

ろばの役割

「彼らは穀物をろばに積んでそこを立ち去った。途中の宿で、一人がろばに餌をやろうとして、……」(創世記 42: 26)

父にも、エジプトの最良のものを積んだろば十頭と、穀物やパン、それに父の道中に必要な食糧を積んだ雌ろば十頭を贈った。(創世記 45: 23)
ろばは荷物の運搬に役立っていたようである。

2 人間を乗せる

馬の役割

「また、こうするよう命じなさい。『エジプトの国から最上の、あなたたちの子供や妻たちを乗せる馬車を引いて行き、父上もそれに乗せて来るがよい。家財道具などには未練を残さないように。エジプトの国中で最良のものが、あなたたちのものになるのだから。』」(創世記 45: 19)

馬は馬車仕立てにされて、人が乗ることができるようになっていたらしい。

3 贈り物として

その夜、ヤコブはそこに野宿して、自分の持ち

物の中から兄エサウへの贈り物を選んだ。それは、雌山羊二百匹、雄山羊二十匹、雌羊二百匹、雄羊二十匹、乳らくだ三十頭とその子供、雌牛四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭であった。それを群れごとに分け、召使いたちの手に渡して言った。……(創世記 32: 14-17)

これは、ヤコブが兄エサウへの贈り物として差し出すためのものである。友好の情を示すためにプレゼントされた。

4 共同生活者としての役割

鳩

共同生活者としても役立っているのは、鳩である。以下見てみよう。

四十日たって、ノアは自分が造った箱舟の窓を開き、鳥を放した。鳥は飛び立ったが、地上の水が乾くの待って、出たり入ったりした。……鳩は止まる所が見つからなかったので、箱舟のノアのもとに帰って来た。水がまだ全地の面を覆っていたからである。ノアは……(創世記 8: 6-9)

更に七日待って、彼は再び鳩を箱舟から放した。鳩は夕方になってノアのもとに帰ってきた。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上から引いたことを知った。(創世記 8: 10-11)

このように、ノアは洪水の水が引いたかどうかの確認を鳩によって知ることができた。

5 「動物たちよ 子を産み増えよ」と神は望む

また、神は動物たちよ、子を産み増えよ！と以下のように望んでいる。

神はノアに仰せになった。

「さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。すべての肉なるもののうちからあなたのもとに来たすべての動物、鳥も家畜も地を這うものも一緒に連れ出し、地に群がり、地上で子を産み、増えるようにしなさい。」(創世記 8: 15-17)

神は動物を増えるようにと願っていることがわかる。

6 人間に食べられるために 神は動物を造ったのか

神が動物を造られた目的は以下のようなものである。

(1) 動物が造られたのは神を讃えるため

神が動物を造った目的は、人に役立つためなのだろうか。そうではないという。「動物の目的は人間という種に仕えることだけではなく、神を讃えることだからである。動物も存在する正当性をもっているものであり、人間もそれを獲得すべく努力しなければならない。』³³

(2) 人間に支配させようという言葉の真の意味は、人間を動物の上に位置づけた支配的な存在ではない。

神の創造物、動物にたいする人間の責任を考えることが大切であるという³⁴。

支配とは、好き勝手にするという意味ではない。見守る、ケアするという意味であり、邪魔者扱い、粗末な扱い、無視、淘汰、虐待、無惨、残虐、殺して捨てるということは神の意図に反しているという。

(3) 動物の肉を食べる時、血を食べないということは、命は食べないということであり、人間は動物の命を私物化してはいけないということである。

創世記においては、人間が動物の肉を食べるのは、本来許されていない。肉食主義者であることが要求されているという³⁵。

(4) 食糧という言葉は、肉を意味するのではなく、植物の種を意味している。パンという言葉が見られることから原料は麦であろう。食糧が尽きたときには、家畜と引き換えに食糧を貰っており、主食は肉、たんぱく質ではなく穀類、でんぷんであることがわかる。

7 それでは日常なにを食べていたのか

ファラオの夢を解く

ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は、どちらも同じ意味でございます。…豊年の七年の間、エジプトの国の産物の五分之一を徴収なさいますように。このようにして、これから訪れる豊年の間に食糧をできるかぎり集めさせ、町々の食糧となる穀物をファラオの管理の下に蓄え、保管させるのです。そうすれば、その食糧がエジプトの国を襲う七年の飢饉に対する国の備蓄となり、飢饉によって国が減びることはないでしょう。」(創世記 41: 25-36)

エジプト以外の食糧のない国々の人々が、飢饉で困って食糧を買うためにエジプトにやって来たことが記されている。

食糧とは穀物を指している。

豊作の七年間、大地は豊かな実りに満ち溢れた。ヨセフはその七年の間に、エジプトの国中の

食糧をできるかぎり集め、その食糧を町々に蓄えさせた。町の周囲の畑にできた食糧を、その町の中に蓄えさせたのである。ヨセフは、海辺の砂ほども多くの穀物を蓄え、ついに量りきれなくなったので、量るのをやめた。(創世記 41: 47-49)

父にも、エジプトの最良のものを積んだらば十頭と、穀物やパン、それに父の道中に必要な食糧を積んだ雌ろば十頭を贈った。(創世記 45: 23)

このように、食べ物として「穀物とパン」が贈り物として贈られている。

8 神への献げ物

創世記では、神の祭壇にはなにが献げられたのだろうか。

1 清い動物

ノアの祭壇

「ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。」(創世記 8: 20)

ここでは清い動物が献げられている。

主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。(創世記 8: 21)

神はよろこばれたようである。

2 アブラハムの子イサク

アブラハム、イサクをささげる

これらのことの後で、神はアブラハムを試された。

神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が「はい」と答えると、神は命じられた。

「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」(創世記 22: 1-2)

神が命じられた場所に着くと、アブラハムは、そこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。(創世記 22: 9-10)

アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼く尽くす献げ物としてささげた。(創世記 22: 13)

「……ヤコブも、父イサクの畏れ敬う方にかけて誓った。ヤコブは山の上でいけにえをささげ、一族を招いて食事を共にした。食事の後、彼らは山で一夜を過ごした。(創世記 31: 54)

ここに記されているいけにえは焼き尽くす献げ物、そのような具体性のない物の二通りである。動物は、雄羊、清い家畜、清い鳥である。

犠牲の基本的意味は被造物の破壊ではなく、神に捧げることである。ご自分のためにそれを造った方にその被造物を返すことである。被造物がその終わりの時に、その幸福を神の、そして神の栄光の中に見つけるためである。……犠牲は、我々が我々の終わりに、神との合一の中に我々の真実の至福を見出そうと我々自身を捧げようとする行為である³⁶⁾。

要するに、それゆえに犠牲の伝統は、神と共にいるために動物的生命から自由になることとして理解される。それは動物的生命が(他の全ての被造物とともに)人間には属しない、神に属するという承認、神はその生命を受け入れ、変容することができるという承認である。この解釈は人を困惑させるかもしれないが、動物の生命の価値とそれにたいする我々の責任にかんする、他の聖書的思考と最も良く連動する考えの一つであるという³⁷⁾。

ま と め

旧約聖書の創世記にあらわれる「食に関連する記述」を追いつながら、神はなにを、どのように食べよといっているのか、肉食を中心に食の位置づけを探った。

1 先ず「何を食べよ」といっているかにおいて、神は人が食べる物を「食べ物」という言葉でよび、「植物」であるという。天地創造の時(創世記 1-3)、神が人に食べよと与えたものは「食べ物」とよばれ、「菜食(動物の肉を含まない)」であった。ところが、しだいに人々は墮落し無法に満ちたものとなったので、神は見かねて洪水を起し地もろとも滅ぼそうとされた。しかし、無垢のノアと少数の清い動物だけを救った。洪水の後神がノアと交わした契約(創世記 9-18)では、すべての肉類一鳥、家畜、家畜以外のすべてが食糧として許されることになった。この背景には、人間の傲慢の蔓延と草が不足する場合の対処などやむなき事情がある。

2 しかし、ノアの洪水のあと、神がノアに与えた

新たな契約としての肉食が無条件で許されたわけではない。それは「血とともに肉を食べてはいけない」という新たな契約であった。血は命だからである。(創世記 9-18) 血を食べないというこの枠組みの範囲内で肉食が許されたのである。動物は神の所有物であり、人間がどうしても食べたいというときにのみ自分の責任において食べよという。

3 菜食とはいえ、神が食べてはならないと指定したものがあつた。それは「知恵の木の実」であつた。しかしアダムはそれを食べ神の命令に違反した。この違反によって、人は後の世まで「食べ物に不自由する」はめに陥つた。自由意志による選択が許されるのは、掟の範囲内だけである。

4 菜食といえども、食べ物は「争いのもとになる」という事実が述べられている。すなわち兄弟が食べ物のために長子の権利を譲つたり、父親をだまして祝福を得たりなどである。

5 創世記では、肉は平常時には食べられていない。尊い神の使いがやって来た時のおもてなしの時、または死の間際にのみ肉が登場するが、普通の人が肉を食べたという記述はない。

6 動物は荷物の運搬や人を乗せたりして尊ばれ有用視され、人と仲良く暮らし共生している。

7 動物は2度だけ神に献げられた。

神の意図とはうらはらに今日みられる肉食の蔓延は、たんに「肉がおいしいから食べたいだけ食べる」という人間欲望のはじめのきかない姿といえる。そこには、動物の存在意味や尊厳に思いをはせようとしない人間の傲慢さが重くのしかかる。

文 献

- 1) 荒井章三編：聖書大事典 p. 565 新教出版社 1991
- 2) 日本聖書協会：聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき 日本聖書協会 1988
- 3) J・C・L ギブソン著、荒井章三、西垣内寿枝訳：創世記 I p. 25 新教出版社 1998
- 4) 同書 p. 119
- 5) 高橋 虔、シュナイダー監修、石川康輔他編集：新共同訳 旧約聖書注解 I 創世記-エステル記 日本基督教団出版部
- 6) 同書 p. 28
- 7) ゲルハルト・リーリートケ著、安田治夫訳：生態学的破局とキリスト教-魚の腹の中で pp. 172-173 新教出版社 1989
- 8) 前掲書 3) p. 201
- 9) 前掲書 3) p. 122
- 10) American Bible Society: Good News Bible-Today's

- English Version* (ed.2) American Bible Society, New York 1992
- 11) The Committee on Bible Transration: *The Holy Bible New International Version* 1983
- 12) The Bible Society in Israel: *Hebrew-English Bible* Tomas Nelson, Inc. 1982
- 13) Andrew Linzey: *Christianity and the Rights of Animals* SPCK 1988
- 14) 前掲書3)p. 75
- 15) 前掲書3)p. 194
- 16) 前掲書5)p. 32
- 17) 前掲書7)p. 194
- 18) 前掲書3)p. 196
- 19) 前掲書3)p. 236
- 20) 前掲書5)p. 33
- 21) G. フォン・ラート著, 荒井章三訳 旧約聖書神学 I イスラエルの歴史伝承の神学 pp. 214-215 日本基督教団出版局 1983
- 22) 前掲書3)pp. 244-245
- 23) 前掲書5)p. 37
- 24) 前掲書17)p. 242
- 25) 前掲書5)p. 39
- 26) 前掲書23)pp. 141-149
- 27) A・リンゼイ著, 宇都宮秀和訳: 神は何のために動物を造ったのか pp. 228-229 教文館 2001
- 28) 同書 p. 229
- 29) 同書 p. 93
- 30) 谷 秦: 神・人・家畜 p. 279 平凡社 1977
- 31) 前掲書5)p. 53
- 32) 前掲書2)p. 55
- 33) 前掲書27)p. 45
- 34) 前掲書27)p. 46
- 35) 前掲書27)pp. 146-147
- 36) 前掲書27)pp. 189-190
- 37) 前掲書27)pp. 190-191